

# “Brother Jacob”における道化的世界<sup>1)</sup>

大 嶋 浩

## I はじめに

“Borther Jacob” (以下, “BJ”と略す) に対する長年の軽視の風潮は, P. A. DaleやB. Grayによる一種の寓話としての再評価により,<sup>2)</sup> ようやく修正が迫られつつある。しかしながら, “BJ”の本質は主要人物達の愚行が織りなす寓話的世界<sup>3)</sup> が, 豊かな喜劇性をともなって拡大されていくところにある。このことに大きく寄与しているのが, 主役の David と Jacob の絡み合いによって展開される道化的世界であるといえよう。

## II 「フールのペア」としての David と Jacob

白痴である Jacob は, すでにそれ自体で natural fool として道化の刻印を帯びていることになるが, Ch. Iで記述されている「毎日, 直径8インチのダンプリングを平らげ」(p. 271),<sup>4)</sup> 「誰よりも早起きして, 彼のために『ちゃんと用意されて』いるミルクの椀を空にする」(p. 281), その旺盛な食欲とぶらりと家をあける「放浪癖」(p. 272) 及びそのグロテスクな身振りや表情——例えば, 顔をしかめ, 歯をむき出しにしたにやにや笑い<sup>5)</sup> や動物等になぞらえられた滑稽な所作<sup>6)</sup> ——は, いずれも道化の伝統的な特徴を示唆するものであり, Jacob の道化性を読者に確認させるものである。George Eliot は一時, この作品に “The Idiot Brother” という題をつけていたこともあり, どうやらEliotは Wordsworth の “The Idiot Boy” を先例としていたのであろうと考えられている。<sup>7)</sup> しかし, “The Idiot Boy” において, おろおろする母親とは関係なく, 梟の合唱に聞き入り, 月を見て笑っている白痴の少年は, 自然と交感し, 独自の「純粹な幻想の世界」<sup>8)</sup> に遊んでいる姿を示すもので, その意味では Wordsworth の白痴は実にロマンティックであると言えるのに対し, Eliot の白痴はもっとグロテスクな滑稽さに富み, 道化的要素がはるかに強いものとなっていると言えるであろう。

道化という観点から言えば, Jacob がいつも手にしている “staff” (p. 281)

——実際には pitchfork である——は、注目に値する。彼の名前と放浪癖を考え合わせると、'Jacob's staff' (pilgrim's staff) への聖書的アリュージョンないしはパロディーとなっているのかもしれないが、道化と(巡礼者の)杖の取り合わせと見なすならば、JacobがDavidの「包み」をそのpitchforkに差し肩に担いでいく姿 (pp. 282-83) は、タローカードのFoolの図像<sup>9)</sup>を幾分想起させるのではないだろうか。しかしながら、道化の持つ staffとして第一に連想されるのは、道化の表徴たる staff、即ち笏杖ないしは道化棒 (a scepter or bauble) であろう。また、この pitchfork は “an idiot with a pitchfork——obviously a difficult friend to shake off by rough usage” (p. 278) と述べられているように、相手に与える威嚇の効果という点ではかなりの威力を発揮している。母親の金貨を盗んで、穴に埋めようとした時、突然現れた Jacob に pitchfork を突きつけられた David は、彼の犯した「罪」(p. 273) ゆえに、思わずその刃先に対して恐怖を感じる。図らずも David の良心に突き付けられた、いわゆる正義の剣ともなっているわけである。そして相手に対して好意を寄せているのか、それとも非難しているのかははっきりとはわからない白痴ゆえの曖昧な態度で、“‘Hoich, Zavy!’” (p. 273) と呼び掛けられた David は、とっさに所持していた黄色いドロップを与えて急場凌ぎをするのである。語り手＝作者も、“... an idiot with equivocal intentions and a pitchfork is as well worth flattering and cajoling as if he were Louis Napoleon.” (p. 274) と、ヒューモラスなコメントを付け加え、読者の笑いを誘う。更に、Jacob はこの物語の中で二度 “wasp” (pp. 283, 325) に喩えられているが、へたに扱えばちくりと刺されるスズメバチの針にあたるのが、この pitchfork だということも出来よう。このように Jacob が手にする pitchfork は、大柄なヨーマンの息子が持つ staff としてはその取り合わせが自然でまさにうってつけのものとして無理なく設定されていながら、道化棒をはじめとするその多様なアリュージョンをもって読者の想像力を巧みに刺激し、その点実に見事である。

さて、Jacob を相手にすると、David もたちまち道化と化してしまう。彼はドロップの入った箱の蓋を開けると、彼の指と口を使って「パントマイム」(p. 274) を演じ、何とか Jacob を懐柔しようとする。一方、相手の Jacob も試しにドロップを一つ取り上げ、「まるで哲学者でもあるかのように」神妙になめてみて、その新しい複雑な味に「Trinculo のワインを飲んだ Caliban

よろしく」(p. 274)恍惚となる。そして満足げな含み笑いをして David をさすり、もっとくれと手を差し出すのである。言わば、Jacob も David に応じて一種のパントマイムを演じているのであり、哲学者と Caliban という多分に対蹠的なものを引き合いに出した直喩により生じる白痴の Jacob の滑稽なグロテスクさが、二人の演じるパントマイムの喜劇性を一層高めている。この二人のパントマイムは、Ch. III においても再び演じられる。Grimworth の Freely=David の店に突然出現して騒ぎを引き起こした Jacob はその晩、Freely の店に泊まることになるが、明け方、ぐっすりと眠っている Jacob を何とか静かに起こそうと声をたてずにいろいろと手を尽くす Freely の姿は、まさにパントマイムを彷彿させるものである。

He [David] rose at break of day, as he had once before done when he was in fear of Jacob, and took all gentle means to rouse this fatal brother from his deep sleep; he dared not be loud, because his apprentice was in the house, and would report everything. But Jacob was not to be roused. He fought out with his fist at the unknown cause of disturbance, turned over, and snored again. He must be left to wake as he would. David, with a cold perspiration on his brow, confessed to himself that Jacob could not be got away that day. (p. 320)

これらの場面における David と Jacob は、伝統的な「フールのペア」(the fool pair) と見なすことができよう。ペアの一人は、通常悪党か知恵者、他方は間抜けか鴨役で、二人はしばしば喜劇的演技の中で役割を交換する。David が前者で、Jacob が後者であることは言を俟たない。David は “natural acumen” (p. 303) と “a spirit of contrivance” (p. 268) をもち、Grimworth において「菓子商としては驚くほど賢い」(p. 290) と評されるとともに、その小才を用いて人をペテンに掛けようとするのであり、片や Jacob の方は “Th' innocent” (p. 284) あるいは “a poor half-witted fellow” (p. 317) と呼ばれ、白痴ゆえの無垢な間抜けぶりを示したり、Freely=David の店でどたばた騒ぎを起こしたりするのである。しかし、黄色いドロップを与えてまんまと Jacob を騙したつもりの David は、その後 Jacob につきまとわれ、繰り返し「冷汗」(pp. 284, 320) を流すことになる。David が朝早く、埋めた金貨を取りに行った時、すでに先に来て金貨の入った箱を掘り出していたのは Jacob の

方なのである。“There was no mastery to be obtained over him [Jacob] except by kindness or guile.” (p. 283) であったため、Davidは“guile”の方を試みて、付きまとうJacobを何とか引き離そうとするが旨くいかない。結果的には、逆に“a large breakfast” (p. 283) と“Copious dinner”に“beer” (p. 285) をJacobにおごって、“kindness”を示すことを示すことになる。とりわけ傑作なのは、その coat-tail をつかまれて往生したあげく、乗り込んだ荷馬車のなかでやっとJacobが寝入ったと思ったら、彼がその両腕をしっかりとDavidの身体に巻きつけて寝入ったために、Davidは少しも身動きができなかったという場面である。何も知らない荷車屋は、お世辞のつもりで“Th' innocent's fond on you” (p. 284) とDavidに言うのであるが、困り果てて彼が上げる「うめき声」 (p. 284) と「深刻に考え込む」 (p. 285) 様子が、手にとるように面白く想像されよう。言わば狡猾なDavidが白痴のJacobの手玉にとられた格好になっているのであり、フルのペアの役割交換が喜劇的効果をともなって巧みに行われ、語り手＝作者が指摘する「人間の弄する策略の先見のなさ」及び「愛情深くないものが白痴に好かれることの恐ろしさ」 (p. 278) という一種の教訓の例証となっているのである。Ch. I で述べられ、描き出されているこの教訓は、Ch. IIIにおいて再度、Jacobが登場する場面で一層劇的に展開され、結局、因果応報の理 (“an admirable instance of the unexpected forms in which the great Nemesis hides herself.” [p. 327]) というこの寓話的作品全体を通して語られることとなる処世訓へと収斂していく。その場面を見ていく前に、Ch. I でDavidが犯す悪事を中心にDavidとJacobの道化性を更に考察しておきたい。

まず、Davidが金貨を隠す場所がトネリコの木の前元だということに注目したい。トネリコはイギリスで最もポピュラーな樹木の一つであるが、この木は伝統的にjustice (正義) と関連を持ち、その花言葉が示すように一般にprudence (思慮分別) を象徴する。<sup>10)</sup> 言うまでもなく、prudenceはキリスト教でいう七つの徳の一つであり、それに対立する悪徳はfolly (愚行) である。しかも、follyとはthe Proverbsが示唆するようにprudenceの欠如によるものであるとするならば、<sup>11)</sup> Davidがその根元に金貨を隠そうとしたトネリコの示す「空ろな」 (hollow, p. 273) さまは、Davidのprudenceの欠如、つまり彼の行為の愚かさを暗に示していると言えよう。このfollyとprudenceの対比並びにBiblical namesに由来するDavidとJacobという名前が

示唆するように、<sup>12)</sup> Ch. I で David が悪事を犯す場面は多分にキリスト教的世界へのアリュージョンをもって描かれており、Ch. II と Ch. III において David の振る舞いが Cupid, Fate, Nemesis というギリシャ・ローマ神話の神々への言及を伴い、しかも主要人物である Penny (Penelope) の名前がギリシャ伝説に由来しているのとは幾分対照的である。

キリスト教的観点から言えば、David が盗みを実行するのが四旬節の第3日曜日であることにも注意をむけておきたい。その日 David は恋人であった Sally に会いに行くという偽りの口実をもうけて、教会に行く家族の者達とは別行動をとるわけであるが、この日教会の礼拝で取り上げられる 'the Epistle' と 'the Gospel' は、それぞれ Ephesians 5: 1-14 と St. Luke 11: 14-28 である。<sup>13)</sup> この日のための 'the Gospel' では、悪魔つきと汚れた霊のことが述べられ、人は Christ と共にあるか或いは Satan と共にあるかのいずれかであることが説かれている。David が母親の金貨を盗む場面において、彼が悪事——窃盗を筆頭に虚偽と買収がその主たるものと言えよう——を犯す日を家族の者達が礼拝へ出かける四旬節の第3日曜日とすることによって、間接的に行われている、その日のための 'the Gospel' へのアリュージョンにより、David と Satan との結びつきが巧妙に仄めかされているわけである。しかも以前、David がまだ徒弟奉公をしていた時、親方の金を盗むようにと唆かした "Satan" (p. 270) ではあったが、その折にはその囁きは失敗に帰し、面目を失っていたことを思い出すならば、母親の金貨を盗む場面における David と Satan との結び付きはむしろ当然のこととして推察される事柄であろう。そしてこの度は、Satan にふさわしくテキストの上でも陰に隠れてその姿を直接読者に見せてはいないけれども、その面目を施したと言えるわけである。一方、突然出現した Jacob をドロップを使って欺き、買収する場面において、甘い菓子を与えてくれた David が Jacob にとってたちまち "a sort of sweet-tasted fetish" (p. 278) あるいは "his sweet-flavoured brother" (p. 281) となったとヒューモラスに述べる時、語り手＝作者はこの日のための 'the Epistle' で説かれている "a sweet-smelling savour" (Eph. 5: 2) としての Christ へのアリュージョンを響かせながら、David のもつ sweetness と彼の行為を、Christ の自己犠牲に示された真の sweetness と愛の行為に全く背く卑しいものとして、暗に Jacob に対し一種の倫理的断罪を下していると言えるであろう。このようにキリスト教的コンテクストにおいて David の犯す悪

事＝愚行を見る時、Davidはキリスト教で説かれる二種類の愚か者のうち、the Proverbsで述べられている、勝手気ままで邪悪な愚行を犯す罪人としての、ソロモンの愚か者のタイプを表し、一方、白痴のJacobはその名前に冠せられた形容辞“innocent”(p. 276)や荷車屋が口にする“Th'innicent”に似みじくも示されているように、無垢な愚か者、すなわち永遠の救済が約束された罪なき人間として、聖パウロ的な意味での愚か者に通じるタイプを表していると言えそうである。

ところで、「神にならう者」(Eph. 5: 1)に敵対する者として語り手＝作者により暗に叙述されているDavidであるが、彼にとっては、ドロップを与えて以来、うるさく付きまとうJacobの方こそ“a triumphant demon”(p. 281)ないしは“more terrible than Gorgon or Demogorgon”(p. 285)なものに見え、彼がJacobを恐れているのは読者の笑いを誘うとともに、そこに道化のもつ本質的な二面性と鏡像性の一面が窺えて興味深い。すでに指摘した道化の役割交換にも窺えるように、道化とは本来、両義的な存在である。言い換えれば、善でもあれば悪でもあり、愚者でもあれば賢者でもあるといった二次元性に根ざし、その両次元を自由に行き来する境界人なのである。そしてその二面性は時として道化が一種の鏡として機能し、相手の人間像の本質を写し出すことを可能にする。白痴のJacobは無垢な愚か者として、自分ではそれと意識せずにDavidの奸計を次々と妨害する中で、Davidの分身として彼の行為の愚かさを滑稽に写し出す一種の鏡ともなっているのである。うるさく付きまとうJacobがDavidにとってdemonに見えたり、GorgonやDemogorgon以上に恐ろしいものに見えたりするのも、ちょうど悪事を犯したDavidの心がJacobのpitchforkを恐れたように、臆病なDavidが持つ悪魔的要素が投影され、外在化された結果であり、悪魔的と見えたJacobの姿は実はDavidの心の姿を写し出したものに他ならない。しかもこの場合、Jacobの道化棒たるpitchforkは、Satanの持物で罪を表す「三叉の鉞」(the trident)ないしは悪魔達(demons)が持つ「顎付き槍や叉鉞」(a barbed spear or fork)にたちまち早変わりして、Davidの分身＝鏡像としてのJacobの悪魔性を表徴するものとなっているのである。つまりパウロ的愚か者としてのJacobにソロモンの愚か者の姿が微妙にだぶらせられ、道化と悪魔との伝統的な結びつき<sup>14)</sup>が、DavidだけでなくJacobにも顔をのぞかせているわけである。DavidとJacobのフルのペアは、その悪魔性においても見事な役割交換を果たし、読者のお

かしみを演出して巧みである。

### Ⅲ カーニヴァル的世界の展開

さてCh. Ⅲにおいて再び、道化として登場する白痴のJacobこそ、Ch. Ⅱで語り手＝作者が伏線として述べておいた「見事な運命の逆転」(the fine peripateia or downfall, p. 291)を引き起こす原動力となるものである。道化は幸運とともに悪運をもたらし、道化がもたらすニュースは良いものでもあれば悪いものでもある。ここにも、すでに指摘した道化特有の二面性が見うけられるのであるが、Jacobの再度の登場によってGrimworthにもたらされたものは、Freely=Davidの素姓の暴露という形となって、Davidには悪い知らせ、Grimworthの人々にとっては良い知らせとなり、その二面性が「運命の逆転」を引き起こすのである。その様は、ちょうど「運命の車輪」(Fortune's wheel)の回転を思わせる。Freely=Davidが言わば運命の寵児としてGrimworthの世俗的出世を昇りつめている時、Grimworthの良風美俗はますます墮落の下降線を辿っていたわけであるが、Jacobによって引き起こされた「運命の逆転」は、Freely=Davidの運命の急激な下降をもたらすとともに、Grimworthの良風美俗の回復とyoung Towersの運命の上昇を引き起こす。語り手＝作者がここで使っている“peripateia”という語は、そもそもAristotleの*Poetics*中の用語であり、普通よりも優れた人物を描写しようとする悲劇に関して言われているものである。しかしここでは、この悲劇の用語が語り手＝作者により、普通よりも悪い人間、すなわちAristotleのいう喜劇的な人物であるDavidの運命に関して転用されているのであり、そこに仄めかされているのはパロディストとしての語り手＝作者の姿勢であろう。*Poetics*へのアリュージョンを踏まえて読めば、Ch. ⅢにおけるJacobの突然の出現は、Freely=Davidの素姓が発覚する‘anagnorisis’ (recognition)の瞬間をもたらし、それと同時に上述の「運命の逆転」が起こると言うことができよう。つまり、Aristotleのいう最も優れた‘anagnorisis’の形の、言わば喜劇的パロディーが現出するわけである。そしてこの喜劇的パロディーを成立させる要となるのが、Ch. Ⅲで展開されるJacobの道化性であり、彼によって引き起こされるカーニヴァルの世界に他ならない。

まず、注目されるのがJacobの出現の仕方である。道化はしばしば招かれずにやって来て人の注意を奪うものであるが、Ch. Ⅰと同様、Ch. Ⅲにおい

てもまさに招かれざる客として Jacob は突如、出現してくるのである。もっとも Jacob の出現は、Ch. I では彼が時折行方放浪に出ているという設定、及び Ch. III では最近家で David の住所のことが話題になっていたためであろうという Jonathan の説明により、唐突ではあっても不自然ではないものとして仕組まれている。そしてまた、Ch. I と同様、Ch. III においても Jacob の出現が食べ物と結びつき、彼の大吃ぶりが披露されている点は、古代ギリシャの伴食者以来の道化と食べ物の密接な結び付きという観点からいって、すでに Ch. I で読者に印象づけられていた Jacob の道化性を一層、深めることになろう。しかしながら、Ch. III で特に興味深いのは、Jacob の突然の出現がはっきりと食卓の場と結びついているということである。つまり、Freely=David と Palfrey 一家が午後のお茶のために最良のマフィンとバター付きパンを前に着席している時、Jacob が闖入してくるのである。彼らが集ったこの食卓は、言わば近代市民社会における小市民階級の質素でささやかな饗宴の一種と見なすこともできるのではないだろうか。かつて王侯・貴族の饗宴にはべった道化の末裔として、Jacob もこのささやかな饗宴に飛び入り参加するのである。隣室の店の菓子類を貪り、傍若無人に振る舞う Jacob の出現にこのささやかな饗宴はたちまち大混乱に陥り、やがてその喧騒は町の人々をも巻き込んでいく。こうして、Jacob の突然の出現は道徳的墮落をこうむって硬直化した Grimworth の日常性に非日常性をもたらし、Grimworth の市場は Freely=David の店を中心に、つかの間、非日常的な一種のカーニヴァル的世界へと変貌していくのである。

Jacob の出現と Freely=David の店での騒動は、翌日には Grimworth 中の人々に知れわたり、Freely=David の店の周りは人集りとなる。子供達はこの奇妙な闖入者に「汲めども尽きぬ魅力」(p. 321) を覚えたらしく、一方、一家の戸主達はこの事件のことを調べに一人また一人と店に立ち寄るのである。やがて Jacob を探しにやってきた Jonathan が現れ、Freely=David の素姓が暴かれるとそのニュースはたちまち Mr. Prettyman によって教区中に伝えられて David のスキャンダルに油を注ぎ、その夜、ウルパック亭での the Oyster Club の会合はいつになく David への非難で盛り上がりを見せる。会員の大部分は、David が「やじられて町から追い払われる」(p. 324) のを見たいと表明するのである。会員達のこの期待はつづくパラグラフの中で次第にその現実性を高めていく。そばを離れようとはしない Jacob を連れて一歩店の外



に出たならば、「子供達が後をぞろぞろついて来る」(p. 324)<sup>15)</sup>可能性が十分にあったので、DavidはJacobを家に送りとどけるためにギッグ馬車を手配する。しかし、翌朝早くその馬車に二人が乗り込もうとした時、待ち構えていた市場の住民達は家々の戸口や窓から見つめ、通りの角では徒弟や児童達が群れをなして囃し立てる。それらを大層好意的なものとして誤解したJacobは、それに答えて、例のグロテスクな道化的にやにや笑いをうかべて頷きながら、町を去って行くのである。Jacobにとって菓子類が食べ放題のDavid=Freelyの店はまさに「楽園」(p. 323)であったが、そこでしばし無礼講を楽しんだ後、彼はDavidとともに「皆の嘲笑」(p. 325)を浴びながら、その楽園を追われて行ったわけである。カーニヴァルの世界を集約的に表現する、道化的戴冠と王位剥奪のパターンをそこに重ねて読むことが可能であろう。しかも面白いことに、この一連の出来事においてJacobがそばを離れようとなしないことにより、David自身もJacobと一体化され、カーニヴァルの道化へと格下げされているのである。

そもそも道化的戴冠=剥奪を核とするカーニヴァルの世界とは、転換と交替、死と再生の祝祭に他ならない。Jacobの出現によってGrimworthの市場に姿を表したカーニヴァルの世界で引き起こされる転換と再生が、先に、最もすぐれた'anagnorisis'の喜劇的パロディーとしてとらえた「運命の逆転」にあたるわけである。Jacobがもたらしたカーニヴァルの喧騒と混乱の中で、Davidは没落し、かわってGrimworthの以前の良風美俗が再生していく。「すぐれた料理の秘伝」(p. 326)が年配の婦人達の胸の中に「復活」(p. 326)し、娘達もそれを伝授してもらうのに一生懸命になる。かくしてDavidによってもたらされた「Grimworthの道徳的墮落」(p. 326)は阻止され、健全な活性化がはかられるのである。また、この'anagnorisis'の場面は、一面においてカーニヴァルの世界特有の「さかしまの世界」を浮き彫りにする。Palfrey一家を筆頭に、多かれ少なかれDavidに騙されていたことがわかったGrimworthの人々は、その愚行によって道化(すなわち、悪党のDavidに騙されていた間抜け)へと格下げされ、一方、Jacobは白痴ゆえの傍若無人な振る舞いという愚行を犯しながらも、まさにそれゆえに「Davidの創意工夫の才」(p. 316)をもってしてもどうしても意のままにすることができなかった人物として、白痴=道化から賢者へと格上げされ、両者の相対的評価は逆転してしまう。悪事=愚行を暴露されて嘲笑されるDavidを含め、

Grimworthに住む人々が全員、彼らが犯した何らかの愚行ゆえに、言わば知恵の足りない愚か者＝白痴としてそれぞれの愚かさの点で相互に結ばれる存在となるのに対して、白痴のJacobは生まれつき知恵が足りないためにかえて小さな世間智などに頓着しない無垢の賢者となるわけである。Jacobが現出させたこのさかしまの世界こそは愚者でもあれば賢者でもあるという道化の本質的な両義性のなせるわざであり、ここに道化の極地たる白痴のJacobの真骨頂をみる思いがする。また広義の道化という観点から見れば、Jacobを白痴＝道化とみなす人々が別種の道化＝白痴となっているのであり、ここで明らかにされた万人の道化性の中でJacobが一面において体現している、パウロ的愚か者に通じる無垢なる愚かさの最終的勝利が、読者の笑いを誘いながら喜劇的に描き出されていると言うこともできよう。David対Jacobという従来のフールのペアに、新たにDavid対Grimworthの人々、Jacob対Grimworthの人々というフールのペアが成立し、全員がある意味において道化と化しているわけである。このようにGrimworthのカーニヴァルのさかしまの世界を通して読者にもたらされるものは、白痴＝道化のJacobによる人間の愚行の相対化であり、人間の愚かさの相互性・普遍性の感情であろう。それゆえ、Mr. PrettymanからJacobとの関係をしつこく追求されたDavidが思わず、キリスト教的同胞愛の意を込めて口にする“‘All men are brothers, and idiots particular so’” (p. 321) という言葉は、Daleが19世紀の‘evolutionary psychology’との関連で指摘する、白痴の中に人間の知的進化が本能的段階で止まった姿が見られるとする心理学的(科学的)意味<sup>16)</sup>のほかに、白痴＝道化のJacobとの対比によって明らかとなる、人間の愚かさの相互性・普遍性をいみじくも含意する言葉ともなっているのである。

以上のような解釈を踏まえる時、JacobがDavidとともにギグ馬車に乗って皆から囃し立てながら町を出ていく、一種の道化王追放の場面において、無邪気にグロテスクな道化的笑いを浮かべて頷いているJacobの姿は、生まれながらの道化としてパウロ的な無垢な愚か者を表すと同時に、傍らのDavid及び周りで囃し立てるGrimworthの人々の分身＝鏡像として彼らのそれぞれの道化性をも象徴的に示す道化像となっていると言えよう。つまり、この場面において、Grimworthの人々をかもにしたDavidはその悪事＝愚行ゆえに町の人々から嘲笑・追放され、一方、Grimworthの人々はDavidを嘲笑・追放する中でDavidにかもにされた自らの愚かしさを追放しているのだ

ある。そして生まれながらにして道化である白痴のJacobは、その無邪気でグロテスクな笑いが端的に示しているように、一面において無垢な道化＝賢者でありながらも、他面においてカーニヴァルの道化王として、嘲笑されるDavidの道化性と嘲笑するGrimworthの人々の道化性をもその身に投影・外在化させながら、一種の贖罪の山羊となって町を追われて行くのである。かくしてこの賑やかなJacobの退場とともに、Grimworthにつかの間出現したカーニヴァル的世界もその幕を閉じていく。工夫をこらした嘘によってPennyとの婚約にまでこぎつけていたDavidであるが、結局、Jacobの登場によって引き起こされる「運命の逆転」の中で、「巧みな嘘」(p. 320)をついたことを悔やむことになる。やがてPennyとの婚約も解消されてGrimworthでの商売が成り立たなくなった彼は、店をたたんでどこかへ姿を消してしまう。このようにして「人間の弄する策略の先見のなさ」及び「愛情深くもないものが白痴に好かれることの恐ろしさ」が再度、例証され、寓話的作品として“BJ”が担う因果応報の理という処世訓が最終的に明らかとなったところでこの物語自体も最終的にその幕を閉じていくのである。

#### IV 結び

古来より格言として「愚者の数は無限なり」あるいは「すべてのもの(すべての場所)は愚者に満つ」<sup>17)</sup>と言われるように、どんな人でも内に愚行の力をもっている。その意味では愚行はまさに人間性の一部である。Grimworthに出現したさかしまの世界は、人間の持つこうした愚かしさ——即ち、人が人間である限り潜在的にもつ愚行の力——を滑稽に暴き出したものであり、生まれながらの道化として無邪気にグロテスクな笑いを浮かべて退場するJacobの姿は、人間の持つこの愚行の力を表象するものとして極めて印象的である。DavidとJacobをフルのペアとしてCh. Iで芽吹いた“BJ”の道化的世界は、Ch. IIIにおいて、Grimworthの町全体を包み込むカーニヴァル的世界として花開き、主要人物達の織り成す愚行の世界を広く人間世界全体にまで拡大していく、言わば触媒の機能を果たすものである。“BJ”におけるこの道化的世界の認識は、読者をして、作中人物達の愚行を笑ううちに、人間の愚かさの相互性・普遍性という高みにたつて、人間と人間の営み全体に温かい思いやりの眼差しを向けさせることになろう。Eliot文学の根幹をなす「我々の共感の拡大」<sup>18)</sup>が図らずも喜劇性というオブラートに包まれて、

この短編においても結実しているのを我々は認めることができるのである。その意味では、人間の愚かさの相互性・普遍性をいみじくも含意する“All men are brothers, and idiots particular so”というDavidの言葉こそ、Eliotが“BJ”という喜劇的な寓話を通して読者に語りたかったモラル・メッセージであると言えよう。Eliotのそうした意図は、この短編のタイトルにも示唆されている。白痴のJacobはDavidにとって血縁の兄弟であるばかりでなく、愚行の絆で互いに結ばれている人類にとっても兄弟となっているのであり、まさに“Brother Jacob”というタイトルは、白痴こそとりわけ人類の兄弟だとする、上述のDavidの言葉を一層簡潔に要約したものとなっているのである。

読者が“BJ”で展開される道化的世界を十分に認識することは、“BJ”の作品世界の拡大に関わる極めて重要なものであると言えよう。この道化的世界を媒介として、因果応報を主題とする、この作品の寓話的世界は人間世界全体にまで高め、広められていき、愚行の絆の認識による人間の共感の拡大という、極めてEliot的で真摯な、この作品の中心的意図が達成されるのである。その意味では、これまで喜劇的な軽い読み物として軽視されがちであったこの短編は、豊かな道化的世界を含んだ巧みな喜劇的寓話として高く評価しなおすことができるのではないだろうか。たとえEliot自身がこの短編を“a slight story”あるいは“a trifle”<sup>19)</sup>と呼んでいたとしても、我々としてはそれを真に受ける必要はない。なぜならば、*Romola*の売れ行きが予想外に悪かった償いのために贈る作品として、Eliot自身が“BJ”を本当に取るに足らない、つまらない作品だと考えていたならば、誠実な彼女は到底それをGeorge Smithに贈るようなことはしなかったであろうと思われるからである。

## 注

- 1) ここでいう道化とは、高橋康也氏の『道化の文学』（中公新書、1977）における道化の用法にならい、愚行をなす愚か者という一般的用法と滑稽な言動を専門的職業とする人をさす狭義の用法を共に含んだ、最も広い意味内容をもつfoolの意で使ってある。なお、道化を考えるにあたっては、この他にWilliam Willeford, *The Fool and His Scepter*, (1969; rpt. [USA]: Northwestern University Press, 1986) 及びその邦訳、ウィリアム・ウィルフォード、『道化と笏杖』、高山 宏訳（晶文社、1983）; Enid Welsford, *The Fool: His Social History* (1935; rpt.

Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1966) 及びその邦訳, イーニッド・ウェルズフォード, 『道化』, 内藤健二訳 (晶文社, 1979); S. ピリントン, 『道化の社会史』, 石井美樹子訳 (平凡社, 1986); C. V. バルレーヴェン, 『道化』, 片岡啓治訳 (法政大学出版局, 1986); Mikhail Bakhtin, *Rabelais and His World*, trans. Hélène Iswolsky (Bloomington: Indiana University Press, 1984) 及びその邦訳ミハイール・バフチーン, 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』, 川端香男里訳 (せりか書房, 1985); 山口昌男, 『道化的世界』 (筑摩書房, 1975), 『道化の民俗学』 (筑摩書房, 1985) を主として参照した。

2) Peter Allan Dale, "George Eliot's 'Brother Jacob': Fables and the Physiology of Common Life," *Philological Quarterly*, 64 (1985), 17-35; Berly Gray, Afterword, *Brother Jacob*, by George Eliot (London: Virago Press, 1989), pp. 59-77.

3) 詳しくは拙論「"Brother Jacob"論: その再評価の試み (1)」, 『兵庫教育大学研究紀要』, 10 (兵庫教育大学, 1990), 111-21 及び拙論「"Brother Jacob"における寓話的世界」, 『兵庫教育大学研究紀要』, 11 (兵庫教育大学, 1991), 87-100を参照。

4) George Eliot, "Brother Jacob," Vol. VII of *The Writings of George Eliot* (1907-1908; rpt. New York: AMS Press, 1970), p. 271. 以下, "BJ"からの引用はこの版による。

5) この極めて道化的でグロテスクな笑い方の他に, Jacobの笑い方としては "chuckling and gurgling" (p. 278) が記されている。特に "gurgle"は悦に入った赤ん坊の笑い方を示唆するもので, natural foolとしてのJacobの無邪気さが暗示されているとともに, 図体は「でっかい」(p. 271)のに笑い方は赤ん坊のようだという, そのアンバランスゆえに読者の想像力をくすぐるグロテスクな滑稽さが生じ, 大人-子供 (an adult-child) としてのJacobの道化性を高めるものとなっていると言えよう。

6) 動物的要素は, 言うまでもなく道化の主要な特徴の一つである。例えば, Davidが盗んだ金貨を隠そうとした時, "a bellow" (p. 273) のような音をたてて出現したJacobは雄牛 (bull) にたとえられているのであり, 穴に入れた金貨が黄色いドロップになったのを首をかしげて見つめるJacobの姿は "a reflective monkey" (p. 277) にたとえられている。Davidの包みを引っ掴んで pitchfork に差して肩に担いでいく場面では "a too officious Newfoundland" (p. 282) に, また Davidのそばに付き添うその姿は砂糖入れを離れがたく思う "a wasp" (p. 283) に, それぞれたとえられていると

- いった具合である。これらの比喩によって、Jacobは言わば動物や昆虫へと格下げされ、グロテスクなおかしさが生じるのである。
- 7) F. B. Pinion, ed., *A George Eliot Miscellany* (London: Macmillan, 1982), p. 103.
  - 8) 高野正夫, 『感性の宴』(篠崎書林, 1986), p. 142.
  - 9) Ad de Vries, "Fool, The — (Tarot)," *Dictionary of Symbols and Imagery*, revised ed. (1976; rpt. Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1984).
  - 10) de Vries, "Ash," p. 24; 成田成寿, "ash," 『英語歳時記』, 成田成寿編, 普及版(研究社, 1978).
  - 11) Prov. 13, 14 及び Alexander Cruden, *A Complete Concordance to the Old and New Testament and the Apocrypha*, 3rd ed. (London and New York: Frederic Warne and Co., [1769]) の "Fool" の項の解説を参照。
  - 12) "BJ"における名前の分析の詳細に関しては、拙論「"Brother Jacob"における寓話の世界」, pp. 1-5を参照。
  - 13) *The Book of Common Prayer* (Oxford: Oxford University Press, [1969]), pp. 89-90; J. S. Szirotny, "Two Confectioners the Reverse of Sweet: The Role of Metaphor in Determining George Eliot's Use of Experience," *Studies in Short Fiction*, 21 (1984), 130-31. 以下, Davidの犯行と四旬節の第3日曜日に関する分析は, Szirotnyの指摘に負うところが大きい。
  - 14) 例えば, ソロモンの愚か者の他に, ヴァイス役の道化やかたつて職業道化師が悪魔の申し子と考えられていたことなどが挙げられる。
  - 15) Cf. ブリュエールが『シント・ヨースの縁日』で描いている道化と子供のモチーフ。(ピリントン, pp. 170-71, p. 201の注[-].)
  - 16) Dale, p. 28.
  - 17) 前者の格言は Eccl. 1:15 (Vulg.), 後者は Cicero, *Epistolae ad Familiares*, IX, 22からのもので, 引用はいずれも田中秀央・落合太郎編著, 『ギリシア・ラテン引用用語辞典』, 新增補版(岩波書店, 1963), p. 746による。
  - 18) George Eliot, "The Natural History of German Life," *Westminster Review*, 66 (July, 1856), 51-79; rpt. in *Essays of George Eliot*, ed. Thomas Pinney (1963; rpt. New York: Columbia University Press, 1967), p. 270.
  - 19) George Eliot, Letter to John Blackwood, 31 March 1859, *The George Eliot Letters*, ed. Gordon S. Haight, III (1954; rpt. New Haven: Yale University Press, 1977), 41; George Eliot, Letter to Sara Sophia Hennell, 25 June

1864, *The George Eliot Letters*, IV (1954; rpt. New Haven: Yale University Press, 1975) , 157.

## The Fool and His World in "Brother Jacob"

Hiroshi Oshima

There are fools everywhere. We might at any moment make fools of ourselves. In this sense, the power to play the fool belongs to our essential nature and we share the liability to be foolish. We may recognize that such a power or liability is admirably represented in "Brother Jacob."

From the beginning of the story, Jacob appears as the fool in a broad sense, since he is an idiot — a natural fool. In Chapter I, he presents some conventional characteristics of the fool, such as his vast appetite, his occasional wanderings, his comical grotesque laugh and behaviour. Compared with a Romantic idiot in "The Idiot Boy" by Wordsworth, Jacob seems to be far more comical and grotesque.

In contrast to Jacob, David is a man of natural acumen and above all gifted with a spirit of contrivance, but in dealing with Jacob, he also falls into the fool and both of them perform a kind of pantomime. They are what is called the fool pair, familiar from a large number of comic entertainments. It is needless to say that David plays the knave or wit and that Jacob the dupe or butt, but their roles are ingeniously exchanged, which creates several amusing scenes.

In Chapter III, when Jacob reappears, this comical grotesque world of the fool pair is developed into a festive carnival one, including the whole of Grimworth. Jacob causes "the fine peripeteia or downfall" and cuts a brilliant figure of the mock king in the carnivalesque reversible world, where all the follies of the main and other characters are to be recognized as part of the essential foolishness of all humanity. It is this feeling of our essential foolishness that George Eliot intended to produce by this short story. In a way, "All men are brothers, and idiots particular so," which David=Freely expresses with the idea of Christian fraternal love, is considered a moral message from the author, because those words connote aptly our intrinsic liability to be foolish.

It is important for the reader to appreciate the fool and his world in "Brother Jacob," through which the fabular world of folly in the story is extended into the whole world of humanity and the Eliotian central idea of "the extension of our sympathies" in recognition of the bond of folly among human creatures is successfully realized. Viewed in this light, this long-neglected short story is highly reevaluated as an excellent fable, evolving the comical, grotesque and carnival world of fools.